

第二六〇号



昭和四二年(1967)二月号 日本山岳会

目次

- 登山以前のモラル 織内信彦…一
- Javelle と Tuckette の邂逅 成瀬岩雄…二
- Andes 学術報告 永坂鉄夫…三
- 生理現象の測定成績 —
- Ereast 関係の書物 神原 達…三
- ソ連の山 (1966) 袋 一平…四
- 主な海外登山 (1967) 武藤清次…四
- 只見から松枝岐へ サトウ公使の別荘 永原輝雄…五
- 海外連絡委員会より二つ…七
- N・Z 便り・東京支部婦人部…八
- 婦人部の皆様へ 杉浦耀子…九
- まぼろしの文献 山崎安治…九
- 図書紹介・日高・田中(栄)…一〇
- ヒマラヤ高峰の新高度二つ…一一
- スポーツ外貨(42年度)…一一
- 会務報告…一二
- 12月海外連絡委、静岡、紅葉会、熊本、東京各支部
- 会員異動…一三
- 新入会員…一四
- 一日に Matterhorn の四山稜…一三

去年の十一月下旬、所用でパリに行っていたある日、訪れた日本大使館でいきなり、やあしばら、と声をかけて現われてきたのが、大使館勤務の大野領事である。大野氏は日本山岳会の会員で、会員番号は一五〇〇番、僕より三四六番古い会員である。

もう三十五年も前、お互いに学生時代上高地の丸石や穂高の湖沢でよく顔を合わせていた間柄であったので、その奇遇に驚くと同時に、大いに久闊を叙しあったばかりでなく、その晩、モンパルナスで食事をしながら、ヨーロッパの山の話、日本の山の話に夜のふけるのも忘れたのであった。

僕は最近満員夜行列車で山へ出かけた。

登山以前のモラル

織内信彦

うのが連中の理窟であるらしい。

ある日、パリ警視庁から大野領事のところへ電話が来てきた。なにごとかと思つて件を聞いてみると、パリ西方の有名なプロニエの森で焚火をしながらか幕営をしている者がいる。急報によつて逮捕してみたがそれは日本から来たアルビニストであつた。お前の方へ引き渡すから日本大使館でしかるべく措置してもらいたい。また今後、プロニエの森などをアルプスと間違えないよう厳重に注意してもらいたい、というのだ。そのとき、大野氏はから大面白く、事の外にさすがの大野領事も飛び上がるんばかりにびびり出した。

僕はパリへ来る前機会があつてチロールの入口を少しのぞいてきた。その時案内してくれたD・A・Vの会員であるH君からも似たような話を聞かされた。

めの余暇にヨーロッパのアルプスまで、比較的気軽に足をのぼすようになったことは一面日本の登山のレベルアップの結果とも言えるし、それ自体は結構なことだといつてよい。ところが、うす汚くない登山姿でジャンゼリザの大通りを横に細長い大きなリニエツカザックをかついで練りあるいたり、そういう恰好で大使館へやってくる、カラビナをガチャガチャやったり、なかにはアプミを壁にぶらさげて実演をしてみせたりするのがある。そういうものである。そうして、いきなりC・A・Dのエルツォークに会わしてくれという要求がある。エルツォークといえはひと頃フランス内閣の閣僚に列していた人物であるからアポイントもなしにそう簡単に会えるものではない。こういう場合アルビニストなら合つてくれ

た。スイスへ行ってみたら大きくスイスアルプスエクスベディションと書きこんだザックを背にした日本人の登山隊に会つたというのだ。一体この人達はどうな気持ちではある日本からアルプスへ来たのだろうか、とその考え方をはかりかねたのである。

グリנדワルトのベントの鍛冶場で、日本の登山者からビツケルを頼まれたので送つたが、手付金の二本分とかは貰つたが、あとの分は送金してこないとか、どうもあまり愉快な話ではない。

H君の所属しているD・A・V(ドイツ山岳会)は独逸全土の山という山に一定の規格の指導標を設け、その管理をしていくのである。指導標の向きを変えようとする不心得者もないが、指導標が汚損すれば、D・A・Vは直ちにこれを修理する。H君はオーストリアとの国境ミッテンザールの支部に所属している。しかしスイスへ行つてもヒュッテの使用料は一五マルク(邦貨約一三五円)と優遇され、鉄道も割引がある。この点日本山岳会はどうだろうかとか聞かれて僕は答えに窮した。近來スイスの山へ入れかわり立ちかわり日本の登山者が押しかけ、なにかは柄の悪きと冒険主義を売り物にしていくような人がないとも言えないし、いわゆる響をかうような行動は日本の国内だけでもどうかと思つているのに、旅の恥はかき捨てて式の日本流を外国の山にまで持ちこまれては全く困りものだ、ということ僕は強く感じたらばかりでなく、外国へ出かける以上はそれだけのマナーやモラルをしっかりと身につけてからでかけてもらいたいと思つた。一山やたらどこかの町で血洗いに身を落し、夏の来るのを待つてまた山へ出かける、こうしたことの繰り返しては、登山者としての人格形成に果たしてなほのことか望まれるだろうか。登山者であると同時に

に、立派な社会人としても成長するという自覚をもって堂々と海外の山で活躍して見たい、と僕は若きアルビニストに望みかけたのである。

また大野氏の話に戻る。ある時大使館へ来た日本の登山者が、どうも様子によるとグラント・ジョラスに登るのだから、後々のためにせめて登山計画を聞かしておいてもらいたい、と計画書の提出を求めたところが、どうせあなた方に話してもわからないでしょうから、という返事なので、自分は三十九年余も前が大学の山岳部で登山をやりに、現に日本山岳会の会員である。ヨーロッパに住んでいるからアルプスもある程度登っている、グラント・ジョラスがどこか知らないは知っているつもりだ、といさゝか気色ばんだところが、わけであつた。そのくせアジシネンなどが起れば、ヘリコプターだ、連絡だと言話を焼かされるのだからたまつたものではない。大野氏は、しかしこういう連中は日本山岳会の会員ではない、といわんばかりの意味も含めてそう嘆いていた。

彼と別れてから二週間ばかりの後の十二月中旬、僕はひとり雪のツェルマツトで数日を過ごした。そして毎日のようにかけてはヴァリス四千米級の快晴の山々をみてゐた。

ホテル・モンテロザの前を通ると誰でも気がつくのがウインパーのレリーフである。通りに面した壁にさり気なくほめこまれたウインパーの像は碑文もなければ功績をたゞえる文字もなく百年祭に花輪もかけるのに使つたのではないかと思われる釘跡の孔がレリーフの上側に不細工のこつているのが眼立つだけであつた。

百年前、アルプスのいわゆる黄金時代の最後を飾る偉業をなしたとげたタイムパリーにしては余りにも清々しいレリーフ、いったい誰の手によってこの壁にとりつけられたものか僕は知らないが、いかにも奥床しさを感ぜざるものであったし、マッターホルンをめぐる登攀史にはタイムパリーの前後にもチンダル、マンメリ、ギド・レイを始めとして数々の後世に伝えられる名登山家が登場してくるが、それらの人々のレリーフとか肖像とかいうものがあるの僕は知らない。

わずかにモンブランの初期登攀者ド・ソニエールの像がシャモニーにあるくらいではなからうか。アイガーのミッテレギーの山小屋には積さんの肖像が掲げられている。これは山小屋の中である。

ところで僕は会報の二五八号を読んだでびっくりした。またまた日本の山の上に肖像とかができたのだそうである。しかも現に元気で活躍している人のだというに至ってははややうべき言葉を知らなかつた。この調子でいくと、いまに日本の山という山は銅製のレリーフで埋ってしまうのではあるまいか、とさへ懸念するのは僕ばかりではあるまい。

日本人の悪い癖で、誰かが始めるとすぐ真似をする。あれがやるならこっちもやろうという競争意識と流行、このようなことがやたらと山上の岩へレリーフをはじめこみ、あまつさえ山中いたるところに遭難者の墓標をたてた。そして、それらの人とは無縁の多くの登山者の心を不要に痛ませるような結果を招いているのである。

肖像をつくられた人のなかには、おそらくかたがたされて迷惑を感じている人も少なくないであろう。問題はそのほかにあるように思われる。

僕はアルビン・ミューゼアムのようなものを山岳会や山岳協会あたりでいまのうちに企画して、現在京都や兵庫

や飛騨や、秩父やそして新潟やその他の山々に散らしているであろうレリーフの類を回収し、一堂におさめてそれらの先人の功績を讃えるようにしてはどうかと思うのだが如何なものであろう。レリーフは上高地のウェストンさんだけでいいではないか。(終り)

エミール・ジャヴェル
F.F. タケットの邂逅
会員番号 865 成瀬 岩 雄

エミール・ジャヴェルについては既に「先蹤者」の著者によって「山とスキー」誌上で充分知らされ、僕などはそのお陰で當時その著書「Souvenirs d'un Alpiniste」の英訳を必ず携えては神津牧場を十数回も訪れ、ジャヴェルの愛したと云うヴァル・ダニヴィエ(Val d'Anniviers)のツィナル(Zinal)等は恐ろしくこんな処ではないかしら……等と」

「……前にいったと思うが、此処には他に二人の旅行者がいた。僕は晩飯の席でこの二人の連中と知合いになった。一人はTさんと云うイギリス人で彼等が皆そうである様に、このイギリス人も立派な紳士であり、アルバイン・クラブの会員でもあり、高い山を今迄に随分登っている大登山家だ。それに……多くの同国人に見受けられる様に高慢でも、無口でもなく、従って常軌を逸しておらず却って気持のよい話相手でフランス語もスラソと云うから学力があり優れた御仁と云う所だ。

もう一人の人は「B」さんと云うフランス人だ。上流階級の人で利息収入のおかげでヨーロッパを歩き廻り、芸術、科学、自然、等政治以外のあらゆるものに興味を持って記念建造物、博物館、文学者、勝れた科学者を訪ねては楽しんで居る様な人物だ。政治ではかつて危く災難が身にいかるところだったそうだが……

斯んな事をして眼を楽しませ、知力を含養して自分の人生を送って来たんだから全く幸福な人物だ。旅行のスケジュールなんて全然持っていない、行き当りパツタリに山でも谷でも行き当ればそれを手がけて登る。この人は此処が馬鹿に気に入る様で何か気が変わって他処へ行き度くなる迄、此処に停つて居ることだろう。

イギリス人の方は之と全く反対にチヤンと自分の脚と財布とにふさわしい旅程を組んで几帳面に之に従い忠実に実行している様な人物だ。貴者や僕の横断するのは僅かな小さな旅行をするのに八日間を何んとか工面して抜け出す様な事をするのに、この幸運な人は五月からズツト山登りに出掛けて来てるそうで、今迄に頂上には十九、時には三十五も登ったと、それも何れも本当に皆、ありきたりの処ではない相当な処ばかりだ。この人は此処から氷河越えをやってエボレーナ(Evolena)へ出てゴラン・ブランシ(Dent Blanche)に登るそうだった。このイギリス人の話に耳を傾けただけで気が遠くなりそうなの。C君は年長者の権威を傘にいくさりのお説教をブツと云うところだったのが恰度、二人のガイドが明日の行程の打合せに入ってきたのだからこのイギリス紳士は明日の早立ちのため部屋に帰って行った。C君と僕は夜更迄雑談に明け、明日は一日、一緒に散歩して暮そうと云う事にした。

この中のこのイギリス紳士「MR. T」(原文、原文)。アルバイン・クラブの会員で大登山家とは一体、誰な

のだろう……と云う事だった。それらのこの英訳本の巻尾には地名、人名を克明に網羅した索引が掲げられて、御丁寧に「MR. T」と迄載っている。つまり我々、読者にとっては誰だか判らない、一名無しの権兵衛が敬称付きで載っているのだから益々僕の心を焦らせるのであった。

何れは当時の名だたる登山家には違いないとは思っていたもの、あの文章の何処を繕いても山を背景にした自然文学の粹とも云いたい、読者にしたその間にこそその境地に引ずり込む様な名文であり、それに尚悪い事には、当時、偶々「雪崩」なる題名のもとにアルプスの山々を背景にダニヴィエの山村風物を写した活動写真を「先蹤者」の著者に誘われて二度か三度、見に行つたりした事もあるの時に「ジョークフリートの「Aquila」を掲げては僕なりに一幅の想像画も描いていたので、それだけに何んとかこのT氏なる人物の正体を知り度いとか永年の心残りになっていたのだ。否、半分は諦め、もどかしく思っていたのだ。

併し、最近漸く僕はこのT氏なる人物に「邂逅した」と云っては大袈裟だが……之も世の奇しきものも合せと云わうか。勿論T氏そのものが現存している由もないが、要するに別の文献によって偶然タケット(Francis Fox Tuet)である事を見出したのだ。

結構、タケットならアルプスを東から西に突っ込みとばかり股に掛け、その広大なる足跡は登山史上に於て次代のジョン・ポールとまで云われ、又、ガイド連中の間では「鬼」の異名を得、あれこちの山村民の間では超人扱いされて来たのだから、到る所で「邂逅の場面」を作り出せば、若い登山家を感激させていた事は僕も百も承知していたのだ。「矢張りそなたのか……」と漸く安堵の胸を撫で下した次第だ。その昔、フレッシユフィールドが未だ十九才のイートン校の学生時代、漸

く登山のイロハを覚えた頃、ベルニナの山中の宿で同じくT氏に邂逅、恐懼、感激の一文を記した時の年令に比べれば当時、ジャヴェルの登山は漸く油の乗って来た二十五才の時であったのだから、フレッシユフィールドの様な、ネッカーラの手離しで感激しているも、片や名だたるイギリスの登山家、片や国籍を異にするフランスの青年登山家、

ガストン・レビュファ
の来日——映画と共に

映画「天と地の間」をもってフランスのレビュファが訪日する。これは第一〇回国際山岳探検映画祭(トレント市)でグラン・プリを獲得したもので、上映時間は一時間四〇分、総天然色。一般商業劇場では上映しない。スケジュール左の如し。

4・6・14 東京虎ノ門ホール
4・15・22 地方上映
4・23・25 東京虎ノ門ホール

その他詳細未詳

山家で、タケットの名声も如何にアルプスに響き渡っていたかと云う事もこの一ことでも判るし僕にとっては漸く肩の荷が降りたと云うところだ。タケットについては既に「先蹤者」に詳しく述べられているから今更僕などが此処で受売する必要もないが、早くからA.C.の会長に度々推されながら固辞して受けず、その歿後に初めて永年に渉る登山日記をまとめた「A Pioneer in the High Alps」が一九二〇年、公にされたが、その中の十四章に、一八七二年、ツィナルで「ジャヴェルに邂逅した」とのみ、ほんの一行ばかり書かれて「この件はジャヴェルの「Souvenirs d'un Alpiniste」に面白く書かれてある」旨の脚註が編者によって付記されてあるのに邂逅したわけだ。(次頁へ)

思えば、僕にとっては随分水心の旅路。否、迷路ではあったが漸く峠の向う側を眺められる時の様な爽やかな気分持てその昔、「M.R.T」なる文字の上に鉛筆で薄く印を置いていたのを消し何十年振りかの神津牧場を訪れて見た様な気もするのだ……

それにしてもこのタケットの著書によれば日本にも来た事があると云うのだが、勿論、ウェストンやフレッシュフィールド等の来た以前の事。日本山岳会など未だ生れていない時代の事だし、レジスにも三度目の世界旅行を終えて間もなく、八十才で急病死したとは記されているが、来日の時は特に記していないのだから詳しい事が判らないのは残念だが、巻尾の写真を見ても、当時、多くの尊敬と信頼を一身に集めていたと云う事を正に裏付する様な白髪的好々爺然たるタケットは、木暮さんの頬毛を真白にした様な感じで日本でも何処か山でも歩いたのではないかと……又、新たな心残りも湧いて来そう。

序に云うが、フアーラー (John Percy Farrar) も一八九九年に日本に来て妙義山、浅間山、男体山に登っているが之等も明治三十二年の話だ。フアーラーは一九一七年から十九年迄、A.C.の会長を務め著書こそなければ登山経歴は勿論の事、各国の登山家がいど連中との広汎なる親交振りは到底同時代の何人も遠く及ばず、A.C.会員の中でも抜群の存在であったと云うから「先蹤者」の著者が存命しておれば当然その筆の対照となっていた事は疑う余地のないところである。

何れにせよウェストン、フレッシュフィールド、マム、等の来日は衆知の事としてもタケットやフアーラー迄はその昔、遥々日本を訪れ、之だけ多くの何れもA.C.の錚々たるお歴々が相次いで来たと言ふ事を知っただけでも僕は内心ほく笑ましくならざるを得ないのである。(四一・一一・二八)

☆アンデス学術遠征における☆
二、三の生理現象の測定成績について☆
☆☆☆☆
永坂 鉄夫

1965~1966年名古屋大学アンデス学術遠征隊として、南米アルゼンチンアコンカグア山(6969m)において行った生理学的研究のうち、二、三の実験結果について報告する。被検者は、22~36才の隊員13名。10月11日横濱出航、12月10日現地 Pueno del Inca (2735m) 到着。同処に5~14日間滞在した後アコンカグア中腹の Base Camp (4,200m) に移動した。被検者は4,200m以上の高所に約3週間滞在した。Radiotelemetryの実験以外、すべての研究は Base Camp で行った。

1 高所での Breath Holding (息を止める) の測定
Base Camp 到着後、ほぼ隔日に Pco₂, Po₂, 呼吸量及び呼吸数を測定した。BHT は呼吸位で息を止め、とめられなくなる時 (Breaking Point) 迄の肺泡 Pco₂ は高所滞在日数が増すにつれて次第に減少した。BHT は約2週間間で最小値になった (平均10秒) が Pco₂ は更に低下しつづけた。普通呼吸時の肺泡の Pco₂ も Breaking Point 時の Pco₂ とほぼ同様の減少を呈した。呼吸量、呼吸数及び肺泡 Po₂ は次第に増加し、約3週間間で最大となった。この実験の分析から、呼吸面での高所順応は Breath Holding Time の短縮すること、すなわち呼吸中枢の CO₂ 刺激に対する Sensitivity の増大であり、馴化の能力がよいというのほ、早く BHT の短縮することであると表現出来ること、高所での呼吸量の漸増は1回呼吸量の増加でなく呼吸回数

増加によること等が判明した。

2 循環機能の変化
心拍数、収縮期及び拡張期血圧、心拍出量及び1回拍出量等を Parameter として測定した。循環機能は、Base Camp 到着直後より遅れ、第1週目中ごろから第2週にかけて著明に変化し、第3週以後は次第にもともども如き変化を示した。血圧は1名の例外を除いて被測定者全例が、収縮期血圧の増加を伴わない拡張期血圧の著明な上昇を示した。この脈圧の減少は、全身静脈系に静血の存在することを暗示している。この時各被検者は、多かれ少なかれ筋の脱力感、呼吸困難、咳あるいはあわの多い痰の排分等を訴え、肺循環領域にも強い静血のあることを示した。

3 尿成分、血液成分及び筋力の測定
高所に到着後、早いものは2~3日して、呼吸困難の発生とはほぼ比例して手足の浮腫、顔面のむくみ等、腎、心不全の症状を呈した。この時の尿中には、人により 30~300 mg/dl の大量の蛋白の排出をみた。尿酸、PH 等には著変はなかった。赤血球数、Hemoglobin 値等も、到着後3日迄は変化がなく、以後急激に増加し一定の高い値を保った。

筋力の測定は握力計、ピンチ計及び数取り器を一定時間内におす方法等によって測定されたが、短時間に最大力を要する如き仕事に要する筋力は、高所滞在中も殆んど不変であった。

4 Radiotelemetry System による登攀時の心拍数及び心電図の記録

特別に設計された Radiotelemeter によって、実際 7,000m の高所を登攀中の隊員の心電図、心拍数を記録した。4,200m で安静時の心拍数は、70~84/min であったが、登攀を開始すると同時に急激に増加し、145/min に近くなる。はげしい登攀でも、また 6,000~7,000m の高所での登攀でも 150/min を越えることはなかった。これは心拍数の Ceiling level が高所馴化形成後 150/min におちついたことを示す。1例に於て、登攀時一過性に心拍数の 150/min をこえることがあった。この時はきわめて著明な nodal arrhythmia (期外収縮) 像がみられた。登攀時の心電図は、P 波の増高、PQ 間隔の延長もみられた。

5 太平洋横断日本におこる被検者の体温の日差変動。日本出航以来、合衆国ロサンゼルス到着迄、更にそれより南米の第1寄港地迄毎日、1日4回体温を測定した。船の速度は 14~16ノット、約32分ずつ一日が短縮する大きさであった。このような速度では、合衆国に到着後、現地人の体温の日差変動においつくのに約3~4日必要であることが判明した。

これは飛行機で短時間のうちに現地へ飛んだ場合と比較して現地のリズムに順応出来るに要する時間にはほとんど差のないことを示している。

エベレスト関係の書物
創立六十周年記念展
出品のものへの追加

神原 達

会報二五六号にて山崎安治氏が、右表題のエベレストの本のことを書いていられるが、この展覧会をお手伝いします。まずエベレスト関係の本を集めよ、と云われたのは松田雄一氏で、氏の作られたリストを基にして私が手近かに展覧会に出していた本だけを集めました。当時シルク・ロード踏査に出かけられていた深田久弥氏がおられたら、もともと色々御意見を伺えたのでした。現に帰国早々の深田氏からかなりのご本を出品していたのですが、目録の印刷はもう進行中、次の書物は御所蔵されていることをお知らせしたのでしたが間にあいませんでした。

H.W. Tilman : Everest 1938, Paris, Arthaud, 1952. この本は Mount Everest 1938, Cambridge, 1948. のフランス語版本です。

Finch : Der Kampf um den Everest, Brookhaus, 1925.

フィンチは一九二五年の第二回目の遠征隊員。その英文の The Making of a Mountaineer. の中にエベレストでの体験が載っているが、このドイツ文の本は、どうしてドイツ文だけあって英版がないのか不明。

M. Dolber : Nowhere near Everest. Knopf, 1965.

深田氏のお話ではこの本は漫画入りの滑稽な本、とのこと。

また古い本ではスウェン・ヘディングが Mount Everest. と題してドイツ語で一冊書いている。その本は田中栄蔵氏が御所有と伺った。

ハンドのエベレスト登頂記はこの展覧会では、英・米・独・仏・オランダ日本版を集め得たが、他にもまだまだ多くのものがあるに決っている。少くともイタリー語、スペイン語くらい集めたかったが、できなかった。

インド隊は、John Dias : The Everest Adventure, New Delhi, 1966. という写真集を出したが、この本は展覧会に間に合わなかった。

その他の本でここに記載もれのものをお知らせした御所蔵の方は御教示下さいませ。(十一月十八日)



ダムに見える丸屋旅館の一室に落着き、新国只見山岳会長や、皆川氏をまじえて会食をやり乍ら、自己紹介をする。

福島支部、伊藤彌十郎支部長、武藤清次、安藤治。

山形支部、後藤幹次支部長、後藤恵治、佐藤彦次、吉田宗義。

東京から、後藤山形支部長の友人遠藤桑珠画伯、それに岩だ水だローガンだと、昨年中は暇のあけなかつた川上隆、総勢九名平均年齢四十八才のロートル・パーティー。流石の川上氏も新人同様。

八月一日、雨のち晴

空模様が変わり、今日の天気

が心配だ。皆川氏に奥只見まで同行ねがう。九時発田子倉行バスは、ハイカーや釣人で満員、只見もひらけたものだと感心する。高さ155m、長さ300mの白い壁が、覆いかぶさるように近づいて来ると、バスは大きく右にまわりこみ、ヘヤビシカーブを二ツ三ツまわって約二十五分程でダムサイトに着く。

この頃より雨が降り出し、船からの眺望を楽しみにしていただけに、みんな非常に残念がる。早速乗船する。雨はますますげげしく湖面を叩く。こゝから大鳥口まで約一時間。「船山に登る」と云う事があるが、まさにこれで

ある。昔は、湖底に沈んだ部落や林をぬって、トボトボと歩いた所を、今は快的なエンジンの音を響かせ乍ら船でのぼる。雨のため、期待した只見沢からの浅草岳、鬼ヶ面の眺めも全く駄目であったが、雨に煙る景観も中々乙なものであった。

皆川氏の説明やらラッパやらを聞いていられるうちに、十時四十分大鳥口に到着。大鳥口からは電発のマイクロボスに便乗して奥只見に向う。

昭和三十九年に完成したと云う大鳥ダムは、日本一の大きなタービンをもっているとか。兩岸の絶壁にはさまこまれた、美しいアーチダムだった。

バスは、湖のふちをガタガタヨタヨタ走る。湖は、水没してからまだ日が浅いせいか、色々な大木が、湖面から頭を出しているのが印象的だが、乗心地は御世辞にも快適とは云えない。ギヤの空気が不足している上に、タービンの空気が度毎にストップしてなかなか動かない。心細い事おびただし。それでもとうやうや十一時すぎ奥只見ダムサイトに到着する。ここで

では第二回の海外登山技術研究会が開かれ川上氏や後藤氏にも馴染のある所だ。尾瀬口への定期船は、十三時三十分の事で「六方」の小屋にあって昼食とする。

ダムを一

望に見渡せる部屋に上って、ナニのトレーニングから始まって食事といっておきまりのコースとする。ところが、十三時三十分の定期船などはなく、吾々は足をうばわれて了った形になったが、これがあとでかえって好都合に



なつた。

雨はすっかりあがり、青空も見えはじめて来た。豊富な山菜料理は充分に舌を楽ませてくれる。中でも「あんにんご」なる山菜は誰も中ではじめてお目にかかったものではあるが、一寸かおりがありなかなかいけるものだった。然し、どんな草であるか、或は木であるか、山旅の終りまで遂にわからずじまいだった。皆川氏の話によれば「安妊子」と書くそうだが、売店のびん詰には「杏仁子」と書いてあった。

皆川さんのはからいで、「六方」の若主人がエンジン付の笹船を出してくる事になり、屋根のついた定期船よりは眺めがよいと一同大喜び、しかも費用もガソリン代だけと来ては、願ったりかなったたりだ。船が出るまでの午後のひとときを楽しむ事にする。伊藤のダンナは、眼鏡を額の上にあげてはピントを合わせ、シャッターの音を楽しんでいられる。遠藤画伯は勿論、後藤

望に見渡せる部屋に上って、ナニのトレーニングから始まって食事といっておきまりのコースとする。ところが、十三時三十分の定期船などはなく、吾々は足をうばわれて了った形になったが、これがあとでかえって好都合に

望に見渡せる部屋に上って、ナニのトレーニングから始まって食事といっておきまりのコースとする。ところが、十三時三十分の定期船などはなく、吾々は足をうばわれて了った形になったが、これがあとでかえって好都合に

中禅寺湖畔の紅葉が真盛りの昭和五年の秋、私は父を日光見物に誘った。型の如く、東照宮見物の後、バスで中禅寺に着いたのは夕暮であった。行き当たりばつたりの宿を求めて、湖畔の古びた大黒屋という宿屋に泊って通された二階の室の廊下から見ると、直ぐ下が水澄で、さざ波が岸を洗っている。

この廊下が其頃では珍らしく、一間半もある板張りで、その隅に階段があった。外に出られる様になっていた。変わった間取りだと気がついて、室内を見渡すと、洋間を改造して畳敷にした様子が見える。この不審を給仕に来た女中に聞くと、何でもこの家は元、外人の別荘だったそうである。この話を聞いて父は、この家は或は昔の英国公使の別荘ではないかと、宿の主人に確かめたら、それに間違いなく、別荘を改造して大黒屋としたものだとの話。

これで父は古い記憶を呼戻した様である。

明治三十年頃、父は帝国ホテルに勤めていて、ホテルに出入する客筋の、

「六方」とは珍しい姓だと思ったがこれはニックネームをそのまま屋号にしたものだった。何でも先代か先々代の人が、村の歌舞伎の六方を踏むのが非常に上手であったので、村人達は誰

サトウ公使の別荘

永原 輝 雄



「六方」とは珍しい姓だと思ったがこれはニックネームをそのまま屋号にしたものだった。何でも先代か先々代の人が、村の歌舞伎の六方を踏むのが非常に上手であったので、村人達は誰

父がこよなく紅葉を愛していたので私は日光見物の時期を、秋に選んだ訳だが、はからずも、昔のサトウ別荘に泊ることが出来、一層父を喜ばす事が出来た。

あの大黒屋も其後建直されたらうが、去年だったか中禅寺の大黒屋旅館が、火災に遭った新聞記事を見た時、我がが泊ったあの大黒屋が再び目の前に浮んだ。

去る八月十八日付、朝日新聞夕刊の研究ノート欄で、「再びアーネスト・サトウについて」の一文で、寡聞の私は、武田久吉博士がサトウ公使の御次男である事を、初めて知って感深いものがある。同文の末尾にサトウ家の別荘が、戸塚源兵衛にあった事が、記されているが、同家の別荘が、今一つ中禅寺湖畔にあった事を思い出すと共に幼時の久吉博士が御両親と共に、ここで過ぎた日を、独り想像している私である。(終)

外国人とのつき合いが多く、その一人の当時の英国公使サー・アーネスト・サトウが、日光中禅寺に別荘を持っていて、自ら家族を同伴されるばかりでなく、日光観光の知人にも、利用させていた模様で、そのお世話を父が引受けて、この別荘に何度か客を送り込んだ事があり、自分も一度出掛けたいと思ったが、遂にその機会が得られなかつたとの事である。

それから三十年かの後、父が待望の日光に伴に連れられて来て、偶然にも泊った宿が、縁の深いサトウ家の別荘跡の宿屋であった奇遇に、一人の思い出があつた様だ。

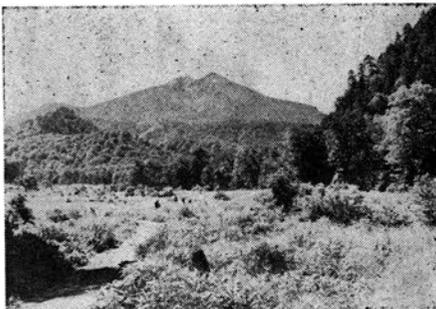
父がこよなく紅葉を愛していたので私は日光見物の時期を、秋に選んだ訳だが、はからずも、昔のサトウ別荘に泊ることが出来、一層父を喜ばす事が出来た。

あの大黒屋も其後建直されたらうが、去年だったか中禅寺の大黒屋旅館が、火災に遭った新聞記事を見た時、我がが泊ったあの大黒屋が再び目の前に浮んだ。

去る八月十八日付、朝日新聞夕刊の研究ノート欄で、「再びアーネスト・サトウについて」の一文で、寡聞の私は、武田久吉博士がサトウ公使の御次男である事を、初めて知って感深いものがある。同文の末尾にサトウ家の別荘が、戸塚源兵衛にあった事が、記されているが、同家の別荘が、今一つ中禅寺湖畔にあった事を思い出すと共に幼時の久吉博士が御両親と共に、ここで過ぎた日を、独り想像している私である。(終)

(前頁下段より)

小沢平より
燧ヶ岳を望む



を蹴立てて進んで来る。吾々の船は、あふりをうけて文字通り筐のようにゆるる。

十五時二十分越後側小臼沢に着く。ここを尾瀬口という。船付場には、大のワシゲル数人が手に顔に包帯をして船を待っていた。天幕内の爆発らしい。聞いてみると案の定、ガソリン・コンロの爆発でやられ、小出の病院に下る所だった。

続いて定期船が到着した。みれば、吾々と今朝田子倉から同じ船にのり、奥只見で十二時の定期船にのった筈の人は降りて来る。シボ沢温泉まで今日中に行くというその人達にとってはとんだ災難だったわけである。彼等ののった船は、乗客にも知らせず行先を変更して越後の荒沢方面に行き、又奥只見に戻ってこゝに来たのだった。シボ沢へ到着する頃は、真暗になって了らうか。

鷹の巣分校前から左へ折れて、只見川にかかる吊橋を渡ると、福島県松枝村赤岩平にはいる。プロペラ式の風力発電機が珍しい。越後側から見るこの十戸ばかりの部落は、赤や緑の屋根が見え、人里離れた開拓部落とは思えない。新潟県の鷹の巣分校と只見川をへだてた向い側に、福島県の赤岩分校がある。こゝより上流の新潟県の子供達は一旦福島県にはいって、赤岩分校の前を通って、新潟県の学校にゆくと言ふ妙な事が生じている。

「この辺に浪洋温泉があった」と伊藤氏が感慨深げにつぶやく。このあたり水深約八十メートルと聞く。細長い湖の彼方、一きわ高く燧が見える。虚空蔵岩十四時三十分通過。山稜に並ぶ奇岩怪石が、どれも仏像に見えるから妙だ。

左岸越後側の山はだには、工事中の観光道路が延々と続き、ブルの響が山峽にこだましている。湖上には大津波発電所建設の資材運搬用大型鉄舟が波

らった時の方がずっと嬉しかったと、笑っているような人だ。

清四郎小屋に泊った日、伊藤のダンナも、あやうくこの人のお世話になる所であったが、老人の頑固さはそれを断った。

分校をすぎると、開墾畑の中を真直ぐに道路がのびている。両側の耕地は耕作されているのは三分の一位か。荒れた畑地が続く。対岸からうけた明るい感じは、この荒れた耕地や、女子供だけの姿と、一体どんな関係があるのだろうか。

十六時、第二の吊橋を渡って、越後側鷹の巣にはいる。十分程で清四郎小屋に着く。空はずっかり晴れ上り、初秋を思わせる肌寒さだ。吉田老は、早速ゴム長作業衣を借りて、只見川に釣に出かける。「酒の肴になる位釣らねえうちは帰るなよ」誰かの声を背に浴び乍ら、それでも、釣竿をかついでいそいそと出かけてゆく。

伊藤氏の話によると、四十年前こゝに泊った当時は、まだこの辺は大木の林がのこっていたとの事だが、今はもうつと開けて、畑の間に家々が点在している静かな部落だ。「タカノス」の名が示す名残はどこにも見当たらない。宿の好意の岩魚で地酒を嗜み、福島からの苦勞してかたいで来た特級酒をぬく。吉田老の獲物は塩焼にして、一同拜むようにしていただく。

八月二日快晴、七時五十分、清四郎小屋に別れをつけ、散在する家の中を南へ南へと廻る。二十分程歩くと、「右平ヶ岳標高二四〇m」とかいた白い指導標が桑畑のはずれに立っている。左「ブナ林にはいり、緑の木洩れ日の中をしばらく行くと、金栗の吊橋に着く。只見川最奥の吊橋であり又、これで越後ともお別れだ。橋を渡れば福島県砂子平。昔は大森林であったろう。茫々たる草原に、白い森が一本まっすぐのびている。亡びゆく大森林の墓標が、大木の切株があらこちに淋しく

立っていた。

九時「尾瀬特別保護地域」の指導標の所につく。道はこゝから只見川をはなれ山の裾をまいて、ぐつと左にまわる。まわりこんだたんに燧の全貌が目にとびこんで来る。

今までの景観とは全く異った、この雄大な燧の姿に、全員思わず足をとめた。

頂上から右の方へ流れ下る稜線が只見の谷と合するあたりから平にのびているのは尾瀬の湿度であろう。湖と、湿度と、森林に囲まれた、燧の神秘的な姿は、吾々に深い感銘を与えた。

大杉分校の小さな校庭では、子供が一人、日向ぼっこをして遊んでいた。この大杉分校の前からは、道が二ツに別れ、右はシボ沢温泉を通じて尾瀬原へ出る道である。ここ小沢平は、今までの開拓地では一ばん広々とした、そして燧を背負い景色のよい所だが、やはり耕地は、やせあれていた。山裾の道ぞいに十戸程の家が散在している。その中の一軒である尾瀬山荘で大休止とする。今年から営業を始めたとか。やがてこゝも所謂都会人好みになってゆくのだろうか。

本日の目的地である御池の小屋はもうすぐだ。熱いお茶をすすり山荘の爺さんの話を聞き乍らゆくり休み十時すぎこゝを出発する。御池の小屋まで高度差約五百米。二十分程林道を登りつめると、木賊沢沿いの道にはいる。「ブナ」「ミズナラ」の太木にまじって「クマシデ」「トチ」「カツラ」などの木が、お互いに日光を求めて、精一杯の力をこめてはしている。重り合った木の葉は、日光を遮り、森の冷気は汗ばんだ身体には心地よい。木の根の階段をのぼり、丸木橋を渡るこの道は、自動車道の予定線から、はずれていると云うのが、何となく嬉しい。「ブナ」林の中にあつた木地小屋も、「コシキ」や「ヘラ」「シャモジ」の残がいの中に柱だけが残っていた。

やがて九曲りの急坂にかかる。林相は、広葉樹から、「ヒメコマツ」や「コマツガ」「シラビソ」などの針葉樹にかわって来る。一歩一歩ゆくりゆくり登る。後藤ダンナは時々「小休止」との大号令をかける。流石の難所も、木の間から、残雪にかがやく平ヶ岳の姿を眺めたりしている中に、思った程苦勞せずすぎる。道端には、名も知らぬ花が咲き、水芭蕉が文字通り芭蕉の如き葉っぱをひろげている。木立にかこまれた緑の瞳、御池田代がみえる。点々と咲き始めた、「オニユリ」が、緑の絨氈の上に綺麗な花模様をえがいている。

十三時四十分、御池小屋着、ピールでこのかわきを癒し乍ら、明日の日程についての話し合う。大杉村から駒ヶ岳松枝村のコースは、やはり相当のコースであるし御老体連は敬遠している様子もあるので、これは割愛し、明日は燧を往復して、バスで木村へ向う事に決定する。

八月三日 曇後雨 愈々山旅最終の日、早目に朝食をとる六時四十五分御池小屋を出発して燧へと向う。

昨日とはうって違って雲行があやしい。針葉樹の大木の間を登り乍ら、様々の形をした樹木に一ツ一ツ足を止めては觀賞している。「まるで盆栽のようだ」しきりに感心するが、考えみれば、この感じ方も本末転倒じゃあないか。などと後からひやかしがとぶ。

流石裏燧だけの事はある。相当の急坂だがトップの川上氏の適切なリードで確実に高度をかきく。広沢田代をすぎ、九時熊沢田代につく。目前に燧がグツとしかかるようにそびえ立っている。双耳峰の頂上附近を時々ガスがかすめる。つめたい風が吹き出すと共に雨が降り出した。雨具はもって来てないし、それに伊藤・後藤両雄の四十年前の感激も充分味わえたようでもあったので、頂上を目前にして涙をのん

海外連絡委員会

在日外国人 登山家との 交歓パーティ

登山を愛好する在日外国人と、本委員会との交歓会を、去る十一月二十五日夜東京赤坂のOAGハウス内のジャーマン・クラブで開催した。

海外連絡委員会では、かねてより本会の外国人

会員に対するサービスならびに在日外国人の登山愛好家に、本会を理解して戴くために、これらの方々をお招きして交歓会を開いてはとの考えをもっていた。中々機会がないままに今日に至ってしまったが、十月の海外連絡委員会では、是非十一月中に開催しようということになり、十一月二十五日にこの会を開催することになった。

会は六時半より開かれ、まず丹部委員の開会の挨拶に始まり、松方会長がゲストの方々を英語で紹介する。

「まず最初にグレン・コンバースさんを御紹介します。おられるは東京大学で地震の研究をしておられるそうで、日本では、山を大いに楽しみましたか?」「イエス」「あなたはシエラ・クラブの会員ですね?」「日本山岳会の会員でもあります」「折りから来日中のイタリーのフォスコ・マライニ氏には、「フォスコ、何か話して下さい」「日本は第二の故郷ともいふべきで……」

ヒマヤン・クラブの会員であるV・Kマレー氏については「あなたは船会社へお勤めで山に登るわけですね」といった名調子で、ユーモアたっぷりに、なごやかな雰囲気の中にゲスト会員の紹介を終る。

本会のメンバーについては、三田渡辺副会長と日高前会長をゲストに紹介する。

次いでビールがあげられ、ヒュッペ形式の晩餐に移る。話題はドイツヤ

アングスの高峰から日本の山にいたるまで広範囲におよび、国際的豊かなことに楽しい一夕であった。

尚、海外連絡委員会では、今後このような催しを適当な時期を選んで続けていきたいと思っておりますので、会員各位の中で、出席を希望される方は予かじめ海外連絡担当理事迄、その旨をお申出下されば、御案内致します。

又外国から、新しい方が来日されてお申出下されば、その旨お知らせ戴ければ幸いです。

最後に、当日の出席者の芳名を記載し、併せて御協力下さった各位に御礼を申し上げます。(関口・松田)



(出席者芳名)

- Mrs. Ema Taguchi, Mr. Walter Meier (Takanaka Komuten), Mr. A.V.K. Murray (The Himalayan Club), Mr. N. Blotit (C.A.F.), Miss Annie Engelmann (C.A.F.), Mr. Glenn Converse (Sierra Club and J.A.C.), Colonel C.M. Nandati (Embassy of India), Mr. Fosco Maraini (C.A.I. and J.A.C.), Mr. William Ophuls (American Embassy and

- Sierra Club), Mr. Ramond Rossier (Swiss Embassy), Mr. Egon Winkler (Austrian Embassy), Mr. Adrian Holzer (British Embassy), Mr. David E. Herron (U.S. Navy), Mr. Alfred R. Glesti (Swiss Embassy), Mr. and Mrs. S. De Roy (J.A.C. and P.T.I.)
- 三田幸夫、渡辺公平、伊官炳、成瀬吉雄、山森左智子、山崎安治、辰沼広島田、巽、磯路須彦、錦織英夫、錦織康子、村山和哉、今井嘉道、佐藤テル日高信六郎、折井健、堀川英司郎、大塚博美、小島、甫、吉沢一郎、神原達、神原直子、松田雄一、松田柳子、丹部節雄、芳野赴夫、芳野菊子、近藤等、深田久弥、牧野文子、関口周也、鈴木郭之、広羽清、余ノ木玲子、梶谷英三子、星野道子、中野正子、以上五十六名

◆ ◆ ◆

・シャモニー・国際アルピニスト集会について・

フランス山岳連盟が、フランス政府の後援により、一年おきに、シャモニーにて開催している国際アルピニスト集会(Le Rassemblement International d'Alpinistes)は、今年七月、シャモニーの国立登山学校を本部にして開催されると思われ、例年その通知が三月末にまいりますので、それからでは会員各位への連絡も十分にできませんので、今年はまだ通知を受けておりませんが、予かじめ会員各位に、その概要をお知らせ致します。参加御希望の方は左記要領にて、本会海外連絡委員会フランス担当・近藤委員迄御連絡下さい。

一、開催日時 昭和四十三年七月十日～七月末日の予定

二、招待者 日本を含み約30ヶ国の代表的山岳会より各二名

三、招待経費 フランス国到着後、シャモニーまでの往復旅費、シャモニーに於ける滞在費、食費、ケトル代等一切の経費はフランス山岳連盟負担、国立登山学校の教官が相談に応じて、山行はあくまでも個人の責任において行なう。

四、本会での推薦基準

- (1) 本会所属の男子会員であること
- (2) 年齢は問はず。尚参加希望者が多い場合は、海外連絡委員会にて選別致しますので御了承下さい。
- (3) 集会に必要な程度の語学ができれば(フランス語ができれば可)積雪期の岩登りの十分な経験を有するもので、今回はなるべく海外登山の経験者
- (4) 二名ペアにて申込みのこと
- (5) 申込締切り期日 昭和四十三年三月末日

氏名、年齢、登山歴を記入の上、必ず二名ペアにてお申込下さい。尚特別に理由があれば、その点、明記して下さい。尚本件についてはお問い合わせは担当の近藤委員に願います。

テラベンドの頂上」

王の胸像

一九六五年は、パレビー国王(Reza Pahlavi)が、イランのシャーイになってから二度五年になるので、同国の最高峰テマベンド(五六七〇メートル)の頂上に、記念の胸像が建てられた。(注・高度は Alpinismus, 66/9 にある)

で引返す事に決定下山する。十時二十分広沢田代につく。雨の中植物学生理学では、酔態学に至るまで、カンカ生ガクガの大論戦。ロートル・パーティの四日にわたる山旅の最終をかざるに相応しい情景ではあったが、ボン池とび出す草花の名前なら、御池の小屋に着くまでですっかり頭からぬけ出た。

十二時、御池の小屋からバスで松枝岐に向う。ここから七入までは「ブナ平」は、つい二・三年前までは「ブナミズナラの密生する林間を「モリカケの滝」など眺め乍らノンビリ下ったものだった。十三時松枝岐丸屋に旅装を解き、早速村内の見学に出る。約千二百年前紀州から移り住んだ藤原氏の末裔と伝えられるこの部落は、「星」橋「平野」の三姓によって占められ、谷あいの狭い土地にある為か、墓地は道の両側に立ち並び、可憐な石地蔵がたかさあるのが有名だ。だがこれらの幕も、道路拡張工事によって、次第に片隅に取片づけられ、独特の「中門作り」の建物も段々影をひそめてゆく文明の波が山の奥までゆきよせ、生活が豊かに便利になってゆくのは大いに結構な事だと思いが、尾瀬沼の畔まで自動車で行かねばならないと云う感覚には賛成出来ない。

後継者もない俣、絶えてしまうかも知れない曲げ物作りの平野孫次翁を訪れ、乾燥中の松材や、ノミ、カンナ、小刀等々の小道具などみせて、いただき、酌々との語る老の話を聞ける。山村の必需品として作られ、受け継がれて来た「曲げワッパ」も、民芸品としての形だけを残し、都会人向けの観光土産となつて了つた。と淡々と語る比較的天候にもめぐる。楽しかった山旅も、秋を思わせる松枝岐の夕暮と共に、静かにその幕をとした。(終り)

本三〇回小集会兼東京支部十一月三水会におきまして、映画「雪崩」をお目にかけるはずでしたが、その到着を運搬の事故による不注意がその到着が遅れ、手配するところからできませんでした。深くお詫言申し上げます。(野萩)

本三〇回小集会兼東京支部十一月三水会におきまして、映画「雪崩」をお目にかけるはずでしたが、その到着を運搬の事故による不注意がその到着が遅れ、手配するところからできませんでした。深くお詫言申し上げます。(野萩)

★海外通信★

N・Z・便り

東京支部婦人部

皆々様

はやいもので十一月十三日神戸を出港して以来、ホッコン経由、十二月三日、ブリスベン、十二月五日、シドニー上陸。十二月六日飛行機でクライストチャーチに到着したとの連絡を受けました。手紙にありま...

日本山岳東京支部婦人部

ニュージラランド親善登山隊 (連絡係 小味・広谷・松水)

出発に際しましては、いろいろとお力添えをいただきました。おかげさまで四人とも相変らずの元気で二十二日間の船旅を終え、十二月六日午前零時無事Christ-

アメリカ南極大陸

12月6日 McMurdo 基地から海軍機で 2000 km 離れた Sentinel 山脈の麓 (2000 m) に飛び、18、19、20の三日間に、隊員10名が夫々 Vinson Massiff (5140 m) の初登頂に成功した。その後の登頂者は Mt. Shinn (4800 m)、Mt. Gardner (4688 m)、Mt. Tyree (4965 m)、Mt. Ostenseo (4179 m)、Long Gables (4152 m) の五峰を登りつづけた。

Church に到着いたしました。

昨日から Norman Hardie さんのお宅の一室を使わせていただいています。ここは Christchurch の町を見えるす丘の上で晴れた日は雪の町が見えるそうです。本当に静かな町で、バラやカラーや名前のわからない沢山の花がこの庭にも咲き乱れて、すてきです。

まだ初夏で昨日までは日中も肌寒く町に出るとオーバーを着た人もいますし、夜はだんろを焚く始末で、夏仕度の私たちは震えあがりました。昨夜、私たちと行を共にして下さる方の内、四人のメンバーが訪ねて下さいました。この内の二人 (Mrs. Margaret Clerk と Mrs. Beverley Tweedie) は、前に佐藤テルさんたちと Arther's Pass へいらした方たちです。とても愉快なメンバーで話の半分近くはわからないので (Margaret はとても早口なので) 山登りの連中はどこの国でも同じだなあと感じました。きびしい山行ではありませんが、きつと何か得られると思います。

- 今後のスケジニールをお知らせします。
Arthur's Pass 12/9~12
Unwin Hut 14
Mueller Hut 15~18
Tasman Hut 19~23
Hopkins Valley Camp 24~1/7
Mueller Glacier には、Hardie さんも行って下さります。

今夜は A.C.C の会 (J.A.C.C の小集会のような) があって昆虫のお話だそうです。Hardie さんがつれて行って下さる予定です。又お便りいたします。感謝をこめて

- 山口 節子 秋田 おみ
岡部 浩子 武田 育子
十二月八日
II
ご登りたいたしました。もう年次晩さん会も、忘年会も終って、そろそろ

お出掛けの頃と思います。今年の雪はどんな具合ですか。

私たちは相変らずの元気で、ひどい食欲ぶりを発揮、食糧係の武田育子嬢を一番食べるのですからどうしようもありません。兎に角、今のところ元気で田村トクターや長尾先生にいたいたいお葉はあんまり使いそうもありませんから、御安心下さい。

A Arthur's Pass 十二月九日~十二日、N.Z.A.C. の女性三人と、Mt. Bruce それに翌日男性三人を加えて、Mt. Philistine に登りました。Mt. Bruce はお天気が悪いので登った山で、半分位の高さまで放牧に使っている小さな山です。でも、途中からかなり吹雪かれ、頂上では約七センチの新雪でした。Philistine は Pollaston の北にあり、氷河はありません。この日も天気が変わり易く雪も降りましたが、N.Z. の山のお天気はこんなものらしいです。でもやさしい岩場も、雪の急斜面もあって楽しめました。テルさんたちとも山へ行ったメンバー、マーガレットとヘブも一緒にでしたが (それとナンシー) 三人とも十才位のお子さんがある方達で、本当にすばらしい山登りをします。技術も若い男の人より全然上です。体力もあります。町から三時間ほどこんないいトレーニングの場を持つているのが羨やましいと思えました。この小屋は本当にすてきです。快適でした。

▼ Mueller Hut 十二月十四~十七日
Hemitage から Hooker 氷河の右に Mt. Cook そと正面に Mt. Sefton が大きな氷河を堂々とかけているのを見た時のカンゲキ、御想像下さい。Sefton は非常に大きな山容をしていて、氷河はもつちかしたく、こちらからは登ることもむづかしく、Hardie さんは登るコースを教えてくださいました。ご、ご、ごしました。時々、雪崩の音が響き Mueller Hut からは何回か

見ることができました。この登りは辛いです。五万分の二のような地図がないので、登りの距離がどの位あるのか感覚的につかめませんでした。が、四時間程の急登で上の部分で雪渓をトラバースします。日は後線にあるベッド十二の小さなものですが、それでも毛布はあるし、石油ストーブ、鍋、食器、完備で、とてもきれいに使っています。水は雨水です。

私たちが登った十四日の午後から時速四十~五十マイルの風が吹き始め十五日いっぱい吹き、十六日は風雨、十七日、それからもう下って来ましたが十八日今日もまだ降り続いています。Mt. Staly は Mueller Hut から登り六時間位の美しい山で非常に楽しみにしていたのですが、ついに登る機会がなくおろしてしまいました。これはちょっとしたショックです。何しろ Hardie さんが御一緒したから残念でたまりませんが、どうしようもありません。でも、十五日午後、一寸の風の止み間にクレヴァスからの脱出方法や、ピレインの仕方などを教えていただきました。氷河歩きばかりの国ですから、クレヴァスなどに対する考え方は想像以上にきびしいようです。この方法は帰ってからお話ししようと思います。

明日は飛行機で Tasman Hut に入ります。福岡隊がこの Hut で悪天候のため動けずいますから、きつと会えると思いますが、彼らはテントのポールを風のため全部折られて目下小屋を使っています。愛知隊は気の毒にも船便の荷物がまた着かず、Hemitage の Youth Hostel で待機中。でも二三日中には来るようです。何卒みなさまお元気で新年をお迎え下さい。こどもお正月気分は出ませませんが、最高の年を迎えたいと思います。感謝をこめて。山口、秋田

十七日、Hemitage の A.C.C の小屋に下山してまいりました。Arthur's Pass の小屋、Mueller Hut と食・住の違いもありますが、すべて整えられた素晴らしい小屋ばかりで羨しい限りです。J.A.C.C も上高地だけでなく、もっとと建ててほしいものです。今夏だけ宿泊する当ではありませんが、皆、一人一人がどうすればいいか、やすすくなるか、考え、工夫しているようです。人口が少な山を愛する人たちも少ないこともありますが見習いたいものです。楽しい仲間と楽しい旅を続けられますのも皆さまのお蔭と深く感謝いたしております。

今冬の雪の状態は如何ですか、相変らずお天気が不安定なことごとさしい。良いお年をお迎え下さいますように。武田

New Zealand の御婦人部強いにはびびりました。しかも私たちがお会いしたかぎりでは、皆さんお子さんのある方はばかり、体格がちがうと云ってしまえばそれまでですが、どこにそんな力があるのか不思議です。それに食べる量はこちらの方々のほうが少ないのですから、それでも毎日、短かいコンパスをフル回転させ、ついで歩いていきます。十二月十八日 Unwin Hut に、

III
婦人部の皆様へ
明けましておめでとごさいませ。お元気で新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。おかげさまで四人共最高のお正月をさせていただきました。一月七日、一応予定のスケジニールを終えて、今日から南島のキャンピング旅行にでかけます。Cook 周辺では折角 Norman Hardie さんを伴って NZ.A.C.C. のすばらしいメンバーが同行して下さったのに天候が悪く思

うような山登りができなかったことが残念でなりません。Hopkins Valleyでは渡渉の連続で、とにかくいちばん奥の Mt. Hopkins の下まで行って来ました。

みんな肥ってまっくらです。毎日、食糧係にしかたっています。(山口) とにかくみんな元気です。食欲は日本にいる時の倍位。ショートパンツで歩くので、足は尊敬する位真黒です。Tasman の氷河歩きは本当にすてきでした。来てよかったと、つくづく思っています。(秋田)

例年にならない寒さとのことで初冬のような日が続いております。期待して入山いたしました Mr. Cook 周辺では連日、雨。Hopkins は事故と計画した十分の一の登山も出来ずに下山してしまい、まったく残念でなりません。Hermitage から Christchurch の街路は美しくかざられ、素晴らしい眺めでなくさめられました。これからの旅をせめて楽しく過したいと願っております。(武田)

Tasman でも Hopkins でも頂に立つ機会が少なく、残念ではありますが悔めることのない山行を終えて来ました。

今、皆元気に今日より出かけます南島の旅行の準備におわれています。何もかも未熟な私たちではございますが、又、山とはちがった楽しさがたくさんある事と期待しております。帰りまして皆様に御報告出来るのが楽しみです。(岡部)

一月八日

目下、New Zealand. Mt. Cook 周辺に入山しております婦人部親善登山隊から現地模様を知らせて参りましたのでお知らせ申し上げます。

十二月九日・十二日 Arthur's pass 周辺にてトレイニング。そして小さなピークを二つばかり登りました。

十四日・十七日

Maie Brun Hut に入り、十五日近くの岩場で、クレバスからの脱出法、ビレイの仕方を教わる。十六日停滯。十七日雨の中を Hermitage に下山。二十四日・一月三日

Hopkins Valley の集会に参加。Hermitage → Okau 湖 → Haxley River → Elcho (マドキャン) → 二十

九日、Dasher Pinnacle 往復。三十日休養。三十一日、Bryr Rock へ。午後ロープ切断の事故があり一人行方不明になった。一月一日搜索のため待機

日となった。三日食糧の逆ボツカ。一月四日・六日

全員下山。Elcho → Rake Ohau → Urwin Hut 五日・六日は休養。福岡

隊と一緒にいる。彼らは Cook に三回遡りトレスで成功した由。

七日・八日

Urwin Hut → Christchurch

△今後の予定▽

十九日・十九日

Tinahau → Queenstown → Milford S. ↓西海岸 → 北へめぐって ↓ Christchurch

十九日・二十一日

Christchurch 滞在。荷造り。夜フ

エリで発つ。

二十三日・二十五日

Wellington (Mr. S.G. Marshall の

ついで)。

二十六日

Hanilton.

二十七日・二十九日

Auckland (三菱商事・太田氏のこ

ろ)。日本山岳会東京支部婦人部

ニュージールランド親善登山隊

連絡係 婦人部の皆様へ

五〇〇五番 Yoko Mullen (旧姓 杉浦耀子) お変りなく御活躍の事を存じます。

ここアメリカでも月日の経つのは早かったかと嘆息してしまいます。なる前は不勉強で、どうせだっただく平らな所と思っておりました。ここ南カルフォルニアは予期に反し、山あり谷ありで、大変満足しております。アラスカを除いてはアメリカで一番高い山々の連なる Sierra 山脈も約五時間のドライブの距離にあり、冬のスキーも思う存分楽しめそうで大いに気よくしています。聞くところによるとヨセミテではスキー教師つき(午前一時間、午後一時間個人指導)で宿泊一切ついで一日十三ドルだとか。しかも大変空いて雪もよいという話です。更めて腰曲りスキーから脱脚しようかなどと考えています。

山登りは日本のようにポピュラーではありませんが、ハイキング程度は誰もが楽しんでます。シエラ山脈の最高峰、マウント・ホイットニー(東の谷)は四、四一八米ありますが表通り(東の谷)は誰でも登れる大通りです。毎年九月の労働の祝日には早登りの競走があるそうです。八〇〇〇呎(二、四三八米)まで車が入りません。山容は北アルプスの規模を大きくしたような感じですが、登りによさそうな所が沢山あります。途中手ごろな場所に湖が数ヶありますが、中でも雪に囲まれた Consultation Lake 最高所の Trail Camp のある湖は山々を写しだし美しい湖です。トレイル・キャンプでもテントをはいて、あちこちの岩場を登ったら面白いことではあ

こちらのよいことは、山に入っているの少ないこと、動物や鳥の多いこと、そして又こうした生き物が、人なつっことして一層の楽しみます。一匹のマウンテン・モルモットのみです。ひには私の手からクッキーを喰べたほどです。又装備の面では、夏山には全く雨の心配のないことから、重いテントも雨

具も不要です。マウント・ホイットニーの西側は広い谷で、その向うに山々が連らなっています。ここには道はついで入らないようです。又一寸北側の山々にもまだまだ人気のない美しいところがありそうです。

会の皆様の御活躍を祈りつゝ、又、ニュージールランドへ行った皆さんがよい山行をしてらられることを祈っています。

(十二月二十五日付、婦人部あて)

「楡ヶ岳日記」はまぼろしの文献といわれており、もし実在していれば、是非一読したいと思つてゐるものです。これを初めて紹介されたのは、小島鳥水さんで「氷河と万年雪の山」の中の「日本アルプス登山小史」の中で、津田正生の画像と著作目録中の「楡ヶ岳日記」の広告を挿画として模刻し発表されたものです。小島さんは、尾張の人で「尾張地名考」の著者津田正生(六合庵と号す)が、地理研究のため五十八才の高齢をもつて天保四年に楡ヶ岳に登り、後に「楡ヶ岳日記」を記したと簡単にふれ、同書は岳友高頭仁兵衛氏から借覧したといわれていますが、この本が実在するかどうかといふことは不明とされています。小林義正氏も「山と書物」の、予告



中村清太郎画

まぼろしの文献「楡ヶ岳日記」覚え書

山崎安治

「楡ヶ岳日記」はまぼろしの文献といわれており、もし実在していれば、是非一読したいと思つてゐるものです。これを初めて紹介されたのは、小島鳥水さんで「氷河と万年雪の山」の中の「日本アルプス登山小史」の中で、津田正生の画像と著作目録中の「楡ヶ岳日記」の広告を挿画として模刻し発表されたものです。小島さんは、尾張の人で「尾張地名考」の著者津田正生(六合庵と号す)が、地理研究のため五十八才の高齢をもつて天保四年に楡ヶ岳に登り、後に「楡ヶ岳日記」を記したと簡単にふれ、同書は岳友高頭仁兵衛氏から借覧したといわれていますが、この本が実在するかどうかといふことは不明とされています。小林義正氏も「山と書物」の、予告

のまま未刊に終わった山の本」の中で、初期の楡ヶ岳登山史を語る場合よく引き合いに出される津田正生「楡ヶ岳日記」は著作目録の載った写真版まで紹介されているが、未だ内容について触れた文章に接しないところをみると、紹介者自身持合せないことはもちろん、刊本には写本のいずれかの実在を確認したうえで引照してはなさそうである。といわれています。また熊原政男氏も「登山の夜明け」の中で、「楡ヶ岳日記」について調査されていますが、高頭家にはなく、岡山の某所にあるとだけふれています。その後、熊原氏より直接ふれたところでは、それも疑わしく、また同氏も発見されていないとのことでした。

【編者注】本稿は会員倉田正邦氏からの「楡ヶ岳日記」の所在をお知らせ下さい。津田家の人(名古屋市在住私の知人)が、さがしもとめています。熊谷(金沢文庫長)さんにも聞きました。たが不明のため……との問合わせに対し、山崎安治氏にお願いして書いて頂いたものです。山崎氏の「楡ヶ岳登山に関する主要文献抄並びに解題」(会報二四八・二五〇号参照)の補遺として掲載させて頂きました。(松田)

Salzburger H.K. Expedition

一九六七年、六・七月に OAV の隊が Isstor-Nal の東峰 (7248 m) の初登頂を目指して行く。

隊長は Kurt Lappach、同行者はザルブルクの「高所旅行団体(Hochtouristengruppe) 所属の Manfred Oberegger 及 Albrecht Thausung の二名。(因みに Noshag とイストル・オ・ナールとの間には、まだ七〇〇米級が二つはある) (一・一・一)



図書紹介

Rivista Mensile: Vol. LXXXIV - 1965-Nov. 11
イタリア山岳会報
一九六五年十一月号
日高記

本誌は全巻マッターホルン百年記念号に充てられているので、おそまきながら主な記事を紹介する。

(一) スイス側初登記事 - 一八六五年七月十八日ジュール・ド・ジネーヴ
(二) イタリア側初登記事 - 同年七月二十日付ウインバーからイタリア山岳会書記リミニ宛書翰(注) 四一九〇六年
デ・アマチス山麓からの初登(ウゴ・デ・アマチス稿) 四マッターホルン南壁(一九六三年九月二十三日レナト・ダギンとジオヴァンニ・オッチン兩人は一九三一年ベネデッチの初登路に沿って、さらに直登した) 会報二四八号
吉沢氏記事参照 筆者タギンは本稿執筆直後ダン・デラン北壁冬期登攀中遭難し、遺体は見付からない。(マッターホルン研究(地形、登路、一八五七〜一八六五年の登攀年譜、主要登路と初登の説明(多数の登路見取図添付) 四) フエリチエ・ジョオルダノ(カレルの初登を推進したイタリア山岳会創会会員) 稿「マッターホルンの地理と地質構造」(一八六九年)全文。(四) 一九六五年七月十七日ブルーエにおける登頂百年記念式の記事。(四) 百年記念出版物一覽。

(注) 一八六五年七月二十六日付イ
ンターレーケンからウインバーがイ
タリア山岳会書記リミニに宛てた書翰
は、世の誤解をとくためにこれを伊山
岳会々員に知らせ、新聞にものせるよ
う取計ってほしいと前置きし、パーテ
イの結成から登攀の経過とアクシデン
トの次第を詳述したのち、「タウグワ
ルダーと私はしっかりと足を踏まえ、二
人の間に綱をピンと張り、一体となっ
て持ちこたえたが、綱は綱が切れたの
脚との摩擦による」と云うのは間違
い、急な衝撃のため空中で切れたので
あり、残った部分を見ても、弱って
たり、摺りへたりしたりしたとは見付
からなかった。……タウグワルダー父子
はすっかり消耗し、気落ちして子供の
ように泣き、ふるえるので、それから
二時間あまりの下降中、何時じぶんた
ちにも同じことが起るかと思われ
て、これが最後かと思いつけた」と
記し、遺体捜索の次第と関係者への謝
意を述べ、最後に「一歩の踏みちがえ
やスリップがかかる破壊の原因であっ
た。何のとも何の不注意もガイドに
帰するところはない。かれらは十分に
責任を尽した。しかし、もし綱が、私
とタウグワルダーとの間の如く、ある
べきようにピンと張られていたら、こ
んなおそろしい惨事は避けられたの
であらうし、私がこんな手紙を書くよ
うないや眼にみえずに済んだであらう
と信ずる。綱を適当に換えることは大
事な安全の保障である。岩や雪または水
河の上で、二人が近より綱がたるんで
いる時には、パーティは危険な状態に
ある。もし一人が滑ったり墜落した
ら、誰かが踏み止まる以前に、綱は強
大な牽引力を生じて、一人をほかの一
人の上に引き押し、全員を破滅に陥し
こんだ事があることはあり得ない」と
結んでいる。

スマイス著・吉沢一郎訳
「ウインバー伝」をよんで
田中 栄蔵

吉沢さんの読書は、まづ「読み知る」
ことであり、心とめることである。
興味やわく、知らせることになり、
たのまれなくとも訳しておくことと私
には感じられる。

スマイスの「ウインバー」は、知ら
せる点では抵抗があったらというの
だが、私はまだ原典をよんでいないの
で、この訳文をよんで内容に接した
が、原文でよんだら、この半分も理解
しえなかつたろうと思う。この点訳に
ついては、改めて敬意を表したい。

この本はウインバーの「アルプス登
攀記」(「去年第二刷で改訂され」)を
よんでから、よむのが相応わしい。繰
返えしのところもあるが、ウインバ
ー伝説というものが、スマイスの慧眼
を通して、原典出版当時、英国でど
う理解されていたかを知る事ができる。
スマイスがウインバーの日記を閲読
引用許可されなかつたら、この本はあ
りきたりのものになっていただろう。
著者と遺族とのつながりが、外国に
この種の人物伝、評伝の分野を成立させ
た遺風は、学ぶべきものを啓示してい
て、我々によい手本となるだろう。

それにしても、ウインバーの日記は
異彩をはなっている。曰く「ニュース
なし」これはわが国なら平凡な一日と
いうことらしい。彼にとって何がニュ
イスであるのか。一五才から一九才ま
で、山のとりことなるまでのシリアス
な日々は悲惨でもある。スマイスも、
「日記からのお味」という章で、そ
の分析をして、(一筋に自分の性
向を追い、自分の考えたことをつき
つめるという才能があった)にしても、
兄弟姉妹父母との雑談もなく、友人が
いないのも彼の性格の一つを示してい
る。だが、(これからの一〇〇年間に
わたしては、いったい、どんな人間にな

るのだろうか。時だけが決めることでは
あるが(訳書三四頁)という。ありあ
まるアンビシアスな心をもてあまして
いる性質と社会の中で、彼の日記は(日
記を読むほど、人の真価をよく知る方
法はない)(訳書二二二頁)といっ
ていることから、これを心理や精神
病学者が分析してみたなら、面白い人
間分析ができるのではないだろうか。
スマイスは、登山の面では、よくウイ
ンバーに肉迫しているが、はたして人
間的な面で完璧に食いがつたであろ
うか。とはいっても、スマイスが、
ウインバーの本と日記から、彼の本当
の登山と、書きしるされた印刷物と日
記の間の差異を、徹に入り細をうが
りながら、刻明に追い、分析綜合した功
績というものは、単なる伝記作者には
なしえない、より高次のものと思う。
この点ではウインバーはよき編者を選
たことになる(ウインバーに喚びつく
ヤブニラミ作家の数多くの著書などは
話にならない)。

マッターホルン登頂百年祭を記念し
て、数多くの著書が出ています。だが、
ウインバーに関する限り、この本の右
に出るものはないのであろう。よきにつ
け、あしきにつけと付言して。ただあ
のカスタロフが、彼の生涯に大き
な影を残したことは、改めて認識でき
る。この点で彼は、偉大であると同時に
不幸な人である。まことに栄光と悲
劇をもつ、ギリシャの叙事詩にもにて
いるといえよう。

技術的な面では、ウインバーの足のたし
かさは、常々歩行のトレーニングで鍛
え続け、晩年に至るまでおとろえな
かつた点は注目すべきことである。おそ
らくそうでなかつたら、マッターホル
ンに登ろうとはしなかつたであらう。
だが、初期の登山技術のレベルにつ
いては、ムーアがいうように、ウインバ
ー君はグリゲ、スマイスが下手であるとし
ては、それに水戸論だとか、クレタニ

◇ヒマラヤ高峰の新高度◇
Manaslu (8125→8156 m), Gangapurna
(7315→7426 m), Glacier Dome (7255→7150
m), Tent Peak (5945→5550 m), Ngojumba
Kang-Ngozumpa Ri (7839→Ri I, 7806 m,
Ri II, 7646 m), Khan Jerowa Himal (最
高峰 6882-: 7043 m は行方不明), Ko-i-
Bandakor (6660→6843 m), Koh-i-Chrebek
(6250→6290 m), Koh-i-Mondi (6248→6234
m), Mir Samir(6060→5809 m).
(I. Y.)

ズムを長々と著述しているのは、登攀
記のねむくなる頁だが、もし彼が科学
者になつていたら、ビクトリア朝の一
流の人物となつていたという、スマイ
スの見解には頷ける。

アンデス山行における、ウインバー対
カレルの葛藤は両者のマッターホルン
のシコロと、お互いの人間性からして
仲々興味をつきないものがある。カレ
ルが山男としてすぐれている、ウイ
ンバーの態度には割切れないものを感
ずる。ウインバーにはカレルを説得す
る心得を求めるとは無理だろう。

巻末には吉沢さんの研究論文がのっ
ている。昭和十年「針葉樹」八号に出
たもので、スマイスとの重複はない。
これだけの背景と興味があれば、こ
れの本は訳せもしないだろうし、訳し
てもらいたくないものである、と思う。

最後に吉沢さんの「読み知る」から
出発して「知らせる」ことは最近とみ
にすぎまじくなく、下手とかいう資格
はないが、「正確さ」をきわめて尊重して
いることに、いつも安心感をもち、山
のものこそあつて然りと信ずる。も
しそれ以上をのぞむならば、原典をよ
く読みこなすことであると思う。

「Alpinismus」1966年7月号

一九六三年、スイスで出版された「モリの登頂記のサブ・タイトルは「世界最高の山」であった。英国の登山家ウィリアム・ダグラス・フレッシュフィールドにとってはシッキムのシニョールチューが最高の山であった。多くの人が最も美しい峰を発見したと信じている。それでは最終的にどの山がこの讃辞に値するのだろうか。という

そのうち一人はどの山が最高の山かはっきり決められなかった。八人は返信はきたが最高の山をあげていなかった。ガストン・レニエールを含む三人は最高の山を三つあげてしまった。残りの四人がこの間に対する山を決定した。その内訳は次の通り。

- Alpamayo (4), K² (4), Fitz Roy (3), Grandes Jorasses (3), Matterhorn (3), Mont Blanc (3), Sinochu (3), Anni Dablang (2) Machapuchare (2), Weisshorn (2), Aiguille Verte (1), Campanile di Montavala (1), Cerro Torre (1), Givetta (1), Dhaura giri (1), Jungfrau (1), Kailas (1), Kapelmeier (1), Kangchenjunga (1), Marmolada (1), Monte Agner (1), Stedind (1), Tofana di Rozes (1), Yerupaja (1).

この一覧をみるとモリは一票も得られなかった。または、きりとこれが一番だということもいえない。登山者は大それた個性をもっているといえよう。二票以上の Alpamayo から Weisshorn までの美しい写真が掲載されて投票者の説明が添えられている。概して鋭い山が選ばれているよう

会費の払込みは御済みに
なりましたか。

である。

七月号はこの「世界最高の山特集」で大半を占めている。日本でこういう企画があったらさしずめ富士山・槍・穂高・谷川岳あたりが上位を占めるであろうか。(高橋)

「Alpinismus」1966年8月号

八月号は Raitikon 山塊特集である。レイティコン山塊は、アルプスの東部にあり、東の境は Gargliental と Sehlappinal 北は Illtal 西は Rheintal 南は Prätigau が境界を形成している。高さは二千から三千程度。

トニー・ヒーベラーは Bindenz で成長したので、レイティコン山塊は彼にとって Berghelmat であるが、か

昭和四十二年度
スポーツ外貨割当
海外登山審議委員会
の経過と結果

去る八月三十一日締切られた、昭和四十二年度スポーツ外貨割当希望の海外登山計画を審議する審議委員会が開催されましたが、その模様は概ね次の通りであります。

記

- 日時 昭和四十一年九月十四日 一九〇〇〜二一〇〇
- 場所 日本山岳協会事務所
- 出席者 委員長 日高信六郎 吉沢一郎 渡辺兵力、金坂一郎 近藤 等 村木潤次郎、中野 満 高橋 照 松田雄一、大塚博美 欠席者 加藤泰安、深田久弥、辰沼 広吉。

- 一、審議経過
- 提出計画
- 一橋大学 (一〇、〇〇〇ドル)
- (A) カラコルム又は (B) バタゴニア
- 四月(八名)
- 千葉山岳連盟(九、三五〇ドル
- ・ヒンズークシ・六月(一一名)

てアルプスの開拓者 Ludwig Purtscheller が「メイジユを見ずしてアルプスを知った」というなれたい」といったように、彼にというはレイティコンを知らずして何をか語らん、という訳だ。ヒーベラーの推奨による七日行程の入門コースを追ってみると次の様になる。まず第一日は Feldkirchen Hütte から三時間行程、二日目はそこから南方に進み、美しい石灰岩の尖塔 Drei Schwestern に至る。西方にライン川を望み、その向うには Valdez の町がある。Steg の小屋で泊る。

Schessplana (二九六四米) に登る。次(二日)は Solzbuck Kreuzloch を越えて Heinrich-Huetter Hütte に着く。七日目はレイティコンのマッターホルンといわれている Zimba を通ってヒーベラーゆかりの Bindenz の町に到着する。平均一日に六〜七時間の楽しい山行である。例の如く写真を豊富にのせてあり、読者はレイティコンを写真で一周することが出来る。(高橋)

The Journal of THE MOUNTAIN CLUB OF SOUTH AFRICA Seventy-Fifth Anniversary Issue

南アフリカ山岳会は一九六五年に、現状から判断するに、確答は得られないであろうという推察が強い。登山団体への計画提出案内状にも、この地区への許可の見通しとしての協会の見解を明記しているためであるから、この地区への上げるのは現状として筋に合わない点がある。

- 3 東京農工大学(六、三九二ドル
- ・ペルーアンデス・五月(七名)
- 4 鎌倉山岳協会(三、九〇〇ドル
- ・西イラン十一月(約六名)

○審議要

(1) 一橋大学の計画は(A)案カラコルム・マルビティンク峰、(B)案バタゴニアとなっており、これに対しては一般的な見通しとして現状ではカラコルム地域への登山許可入手は不可能と思われるも、協会からの計画提出案内の際には独自の努力によって昨年来から先遣隊を派遣し、関係筋と接達し、隊自身十中八九許可の保証と見通しを得るに至った経過説明の添書があり、尚今後

も進展をはかる為状況を見て隊長を現地派遣する用意も進めているとも述べられている。そして、カラコルムへの計画が不許可の場合、併行して進めているバタゴニア計画に切り換える準備をしているとされている。これは次の通り。

○本委員会では、B案即ちバタゴニア計画を審議対象として承認し、カラコルム計画は、現時での折衝の結果にまかせるとして、その許可入手の場合にはB案からA案に差しかえる手続きを現時者がすればよい。

七十五周年を迎えた。このクラブのケイプタウンセクションで発行しているジャーナルも一九六五年版を以て、68号に達し、この号は特に「七十五周年記念号」として、クロースの立派な装幀の記念号になっている。



会務報告

12月定期海外連絡委員会

日時 十二月十六日、六時半〜九時

場所 本会ルーム

出席者 三田、深田、袋、吉沢、関口、鈴木、倉知、神原、松田各委員、中島寛、三浦義明

議事

(1)山岳六十二年号に採録すべき海外登山隊の選定。

一九六六年度海外へ出かけた30隊の中より、一段組3隊、二段組13隊を選び、「山岳」編集担当理事に報告することにする。

(2)一九六七年度海外登山隊についての情報交換

現在各地へ23隊が計画中であることを確認

(3)外人の入会希望者に対し便宜供与の件、種々と具体的に検討する。

(4)シヤモニー、国際アルピニスト集会について。会報に発表することを決める。

(5)神原委員、ネパールからの帰国報告

(6)袋委員、グルジアからの帰国報告。

(7)その他海外登山界についての情報交換の件。(松田)

静岡支部創立15周年を祝う

静岡支部は創立十五周年を記念して去る十二月十一日午後四時より、創立日にも出席願ひ、ゆかりの深い藤島敏男名誉会員を招き、市内日興会館五階芙蓉の間で記念パーティを催した。会

員の川端氏の開会の辞に始まり、山本支部長の創立当時の思い出から今日に至るまで、その間に紅葉会は年と共に盛大になり、来年は十周年を迎える等、支部そのもの、事業は、紅葉会と年二回の現地集会が主なもので、ささやかではあるが、山好きの集りとして今後も益々充実発展して行きたいとの挨拶があり、滝浪会員の音頭で、これからの支部の発展を願って乾杯し談笑に入った。特に藤島氏の七十才にして益々盛んな近況の山行に花が咲き、年中暇有りの氏が、一月からの山行が十六回で、暇にあかして計算した足で登った山の高さが、降り足引いて、なんと二万三千数十何米とは、一同驚嘆と羨望の的であった。

その他最近の遭難事故と相俟って、果敢例の問題や、遭難の原因は「山に行ってもとを取ろう」として無理をするからだ」の言葉に、お互に若き日の山行の苦い経験や、思い出したら、又一方最近の遭難者は、救助にあたっても救われなかった時、山に対する礼状なり、言語に絶すると、山に対するモラルの欠除等、厳しい批判も出る等話につきなかつたが、最後に藤島氏の十五周年を記念して、氏の山に対する考え方と併せ、お互が健康でもっと山を好きになり登って貰いたい、会の閉会の辞をもって無事終了した。

(当日の出席者)藤島敏男、滝浪善一、水野公男、石野恭一、児玉博一、岩月計司、石間信夫、柴田昌亮、岩永安雄、鈴木璋一、山本 剛、音成彦始郎、川島礼一、菅谷保夫、杉山泰司、長田義則、川端信治、山本朋三郎、森 村夫以上十九名。(岩永記)

電話についてのお知らせ
外苑コーポ・ビルの都合で、二月一日から当会の電話は直通(四〇四一七六五七)一本になりました。為念。

第九回紅葉会報告 静岡支部

十一月十二、十三日 (於井川村白樺荘)

紅葉会も年を重ねるごとに参加者もふえ、静岡支部の重要な年中行事となりつつある。南アルプス南部の紅葉を満喫しながら、村営の白樺荘でのパーティ懇親会はにぎやかで楽しい一夜であった。

全館借切りの山の宿は明るい夜空にタキ火も燃えさかた、麻生氏の歌劇、フアウストの美しく力強い青年のような声に一同、大いに驚いた。負けじと藤原劇団員の沢田さんの若々しいソプラノが加わって、国際劇場を南アルプスに移したの感である。タキ火を囲んで網蔵さんの想い出話、朝井氏のオヤツと思うほど綺麗な独乙語の歌。中村 謙さんの好々爺然と常に笑顔をとく、えの山の時でない。参加した若い会員はこのような時でないと得られない山は感激につつまれるように時の経つのを忘れるほどであった。毎回出席して下さる観光課長も三回目となったが神谷名誉会員が、来年は紅葉会も十回目であるが、十年で終らせないうようにという発言も終らぬうちに十年と云わず、二十年でも三十年でも、この会も日本山岳会の皆様では非難けたいだきたいと大ハッパであった。

これに呼応するかのようには、井川村長・助役・収入役を始め井川山岳会員で、井川音頭の大合唱、北アルプスの安曇節と肩をならべようというほどの意気込みである。

宴、いまだ半ばであるのに、来年の会場はどこですかと催促される永年勤続組の一人である松本氏の鬼も笑う約束事。言葉は少ないが井川村の森山村長の南アルプス開発の熱意には頭の下る思いである。黙々と舞台裏方をつとめる井川村の大村正さんや、井川山岳会長滝浪善一氏の努力は、今日の紅葉会開催に間に合わすようにと、中の宿

から所ノ沢峠を経て岳ヶ岳への新道開設となつて実った。タキ火の消える最後まで残って若いJ.A.C.会員と山の話をしていただいた高信六郎氏の後輩を大切にされる態度にはいつも頭が下る。

紅葉会終了後、新道竣工検査を兼ねてヘン支部の藤島大老と村尾金二氏のお伴で西部の山本と長田氏が随行。全日空で新婚さんが十二組も松山の海にのまれた日は、一日中突風四十米位の風雨に所ノ沢峠下の天幕、吹きとばされること二度、三度。そのたびにパイプ片手に「山は良いねえ」と御持参のウイスキーでチャールズばりのギャグの大安売。ふんどしの川流れ。吉田茂氏宅の奇談。

天幕を吹きとばす風雪もヘソ曲り登山者には遂に負けて翌日は秋晴れの上天氣に、赤石・聖、荒川岳の山々が紅葉にもえて手に取るようにすぐ間近かであった。参加者一同、十年目の来年を大いに楽しみにして散会。

(参加者次の通り)
荻野恭一、鈴木英一、網蔵志朗、長田義則、中村 謙、麻生武治、岡田英夫、松本熊次郎、福井 勉、深川啓助、神谷 恭、森 村夫、佐藤佳年、藤島敏男、朝井 一男、菅谷保夫、滝浪善一、山本朋三郎、岩永安雄、野口末延、村尾金二、小野利次、牧野 衛、鈴木よし子、佐野仁美、多々良栄、山崎金次郎、山崎都郎、日高信六郎、杉森かつら、山崎チヨ、沢田えみ、杉山泰司、広田、小島甫、木島英三、内海浩也、亀山 馨、大石年彦、山本 寛、西村雅夫、石山謙治、森山長一郎、栗山定男、鈴木長島勝善、園田光一、井川村山岳会員十二名。

熊本支部秋季総会
期日 昭和四十一年十一月十九日(土)二十日(日)
会場 熊本県宇土郡三角町西港三区旅館 三角時雨(一泊)

出席者(願不同) 三谷(孝)、三谷(忠)、玉名、荒尾、馬場、本田、西沢、山代(以上八名)
総会 十九日午後七時から開催
会場は天門橋を目前にして、非常に眺めのよい所。例年どおり懇親会の形で夕食を囲みながら開いたが、今回はさる大分団体において、全日本山岳連盟から同岳連の解散にあたり、永年岳連事業に功績があったことで表彰をうけられた三谷支部長の祝賀を兼ねて行なわれた。三谷支部長には玉名委員から祝詞をのべ、後日記念品を贈ることに決定した。

つづいて会計報告のあと、次のことを申し合せた。
一、来年七月十三日をもって支部創立十周年を迎えるので、来春五月頃記念行事を行なう。場所は、熊本宮崎西果境の内大臣渓谷や、耳川上流等二、三の候補地が挙げられたが、本田会員と支部役員で調査のうえ決定する。

二、県山岳協会加入については、当分見合わせる。これは支部会員のほとんどが、他に地元山岳団体をおして県連に加盟しているためである。
翌二十日は、予定していた次郎丸岳登山を變更して、三谷、本田両氏の自家用車に全員分乗して、天草西海岸へドライブした。天草は初めてと言う人もあって、全員賛成で、一面車の故障が続出して思わぬ結果を招いたが、一同元気に、楽しんで、クリンタン史跡と真珠の島天草を広く見物し、山々の彩りが過ぎた初冬の天草路を探勝した。

天草五橋。それは一号橋から五号橋まで天門橋。中の橋、前島橋と名づけられ、多年天草の人たちが待望していた夢のかけ橋である。この橋は本年九月二十日に開通式をあげた。日本道路公団の手により昭和三十七年七月から四年有余の歳月を経て、総工費三十一億六千四百万円の資財を投じて、その

規模において我が国最大の夢のかけ橋が実現したのである。三角から五橋を渡り松島(合津)まで約十六キロ、一筋の立派な道路がコバルト色の海の間を繞って走り(道路公団が橋の建設を、熊本県が関連道路の建設を受け持った)真珠いかたを左右にみて、天草パールラインと名づけられた。

この橋の建設には次のようなエピソードがある。昭和十年十二月、現在地元大矢野町の森町長が県会議員の頃、定例県議会において天草に橋をかけることを提唱した。その時はまさに夢のごときたわ言として嘲笑された。しかしその後彼も信念をもって提唱しつづけ、私財をもって何度となく、果に嘆願した。一時は戦時中になり忘れられたかに見えたが、戦後再び経済の安定と産業界の進展により、この提唱はいつしか地元民の理解を得て、今日実現の運びに至ったのである。三十年さきのことと予測し、島を愛する一念をもって呼びつづけ、五橋完成が島の産業に、観光に大きく貢献することを確信し、誰よりも喜んだ人はこの森氏であつたらう。

ついでに橋の特徴にふれてみると、五橋ともそれぞれ型と色彩が違い、それぞれに異なつた感じをもっている。宇土半島の突端三角から大矢野島へまたがる第一の橋、天門橋は、全長五一m連続トラス橋で橋脚間の長さ三〇〇m(世界一)、海面より高さ四二mで二万トン級の船舶が自由に航行できる。真珠色で男性的な重量感をうける。最も形がスマートな第三の橋、中の橋は(四号橋と形は似ているが)橋脚間の曲線美が美しく、コンクリート橋としては、ドイツのペンデルフ橋につき橋脚間の長さ一六〇m、世界第二位である。

夕暮に映る橋のシルエットは実に美しいものである。最後の橋、松島橋は、朱色にぬつた、バイブアーチ橋、わが国では例が少ない。勿論この型の橋では

日本一を誇っている。こうして五橋を渡り終えて対岸松島にある千歳山(一六二m)の頂に登つて眺めると、素適なパノラマが展開する。一望のうちに諸島と五橋が眺められ、天草はまさに陸続きになつたのである。しかも現代橋梁技術の粋をこらして最高の技術を投入し、また一人の犠牲者も出さずに完成したことは敬服するものがある。

我々は宿舎を八時半に出発し、二台の自家用車で五橋を渡り、千歳山に登つた。幸い天気がよくて速く雲山まで眺められた。ここから天草島を縦断して西海岸までドライブしたのであるが、紙面の都合で多くを書けない。

最初登山を予定していた次郎丸岳(三九七m)の麓を通つたが、この山の東面をきりたつた岩場であぐらし、標高こそ低いが山の少ない天草では魅力のある山容をしている。天草には高い山はないので、広く天草を一周ならず半周したわけであるが、回つてみると島と思つていた天草は意外に広く、海を知らない児童もいるときいてびっくりした。これから天草も拓けていくことであらう。

記事を依頼されて、いざさか天草五橋の紹介に終つたが、山で行なうべき総会が、今年には海で行なう、天草の観光旅行をしてみた。同じ自然を愛する者にとってこうしたプランも亦善き哉であつた。(西沢)

東京支部

十二月八日(水)役員会
出席者 沼倉、野田、広谷、鈴木和、小味、関口、堀川、戸野、富田、須田、野萩

- 議事
(1)二十周年記念山行の報告
(2)山岳遭難シンポジウムの件
経過報告の後、当日の役割分担を決定。
(3)登山条例の件

今冬より適用される富山県の登山届出制度につき、期間、区域、具体的手続等の詳細が判明したこと、及び谷川岳に関する登山規制の動きにつき報告された。
(4)十二月三水会の牛例年通り忘年会とする。
以上(野萩)

一日にマッターホルンの四山稜を片づけた男達

シュニルマットのガイド、René Arnold, Joseph Graven がその男達。一九六六年九月二十七日午前一時半、Furggen 稜の下のピナック地(3300m)を出発。夜明けにエポール(Epaulle, 4243m, 肩)に上る。それから Picenza のルートを通り、七時半頂上着。直ちにスイス側の Hornli 稜を下り、北壁の下にあるセルバン氷河を横断し、今度は Z'mutt 稜に取りつた。かくて午後四時に再び登りつき、間もなく、イタリー稜の下降を始め、山麓の Breuil についたのが午後の九時。疲れた足の速いのもいたものであつた。(Die Alpen Nov. 1966) (一・六)

◇日本登山学校 冬季授業表◇

- (一月略す)
二月
ジネット気流 天気図の描き方
他(庄司亮、都岳連の遭難救助隊他(寺田甲子男、冬山の医学(雪下国雄)、実技(甲斐駒岳)、降雪の科学(川崎隆章)、実技(谷川三國山)、読書術(平田正昭)、航空撮影(山田圭一)、四国剣山の雪崩遭難報告(気象庁山岳部)、雪山での骨折他(杉本光作))
三月
水壁登攀(吉尾弘)、冬山遭難対策(田山勝)、実技(尾白川溪谷水壁登攀)、利尻岳(東電山ノ会)、耐寒法(中西悟堂)、冬山と女性の生理、春雪崩他、雪山の地形の変化他(五百沢智也)遭難者の心理(深田久弥)、実技(越後駒)、世界山岳情報(吉沢一郎)、岳人伝(マロリー、ラントン・リルン遭難(川崎隆章))
事務所 大田区調布町第一ノ一四〇 川崎隆章 (751) 4046

◇端配のGL遠征(1966)◇

昨年六月にデンマークをあとに、グリーンランドの極北地方へ行ったスイス隊は、そこで二八座の初登頂と Lautpersberg の第二登頂をやつた。最高峰は三五八mで、これを Eisdome(Dome de Glace)と命名したが、他の峰々も大体二五〇〇m前後のものであつたらう。(Die Alpen, Nov. 1966)

ルーム日誌 (41年11月)

2日(水) 東京支部役員会
 8日(火) 学生部委員会
 10日(木) 定例理事評議員会
 11日(金) 学生部委員会
 19日(土) 遭難シンポジウム打合せ
 24日(木) 婦人部
 29日(火) 学生部委員会

ルーム日誌 (41年12月)

1日(木) 理事評議員会
 2日(金) 学生部B委員会
 5日(月) 学生部C委員会
 6日(火) 学生部A委員会
 7日(水) 東京支部役員会
 16日(金) 海外連絡委員会
 21日(水) 三水会忘年会
 22日(木) 婦人部
 他に土曜会 3・10・17・24

編集後記

☆二五八号五頁の「熊」の写真の説明は「编者」としてあるが、あれは吉沢が書いたものです。主文筆者の井出さんでないことを、念のため瞭らかにしておきます。☆近頃「山男」はいろんな方面で「黒星」続き。本当の「山男」は山のことだけ考えておればよい。権力や権威はこれを追うものに来らず、無理にも追えば躓づくだけである。☆会報早くなったり遅くなったり、どうも相済みません。(吉沢一郎)

昭和四十二年二月十日発行

東京都渋谷区神宮前

三ノ三二 外苑二一ボ内

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 吉沢一郎

頒価五十円 (40) 七六五七

振替口座東京四八二九番

東京都港區一丁目三ノ六番

印刷所 株式会社 技報堂

あなたのネガから、大型パネル(枠)張り

お部屋の飾りに! 贈りものに!

あなたのネガから、明快なコントラスト適切なトリミング(構図)で、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。
 ネガと返送料150円同封でご注文下されば到着後5日以内に製作発送いたします。
 代金は着品後10日以内にご送金下されば結構です。なお代金前払いの方は返送料は弊社で負担いたします。また、特にトリミングをご希望の方はその旨明示して下さい。
 但しネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまま直ちにご返送申し上げます。

山岳写真を

(本多善博)

本多写真工房

名古屋市南区柴田西町 1-16 電話 (611) 7047

- 全紙半切 パネル張り ￥1,000
- 全紙 (新聞1ページ大) " ￥1,500
- 全紙2倍 " ￥4,000

上記以外のサイズ、または同時に多数ご注文の際は、ご照会下されば別にお見積り申し上げます。

'67におくる新企画!

大ヒマラヤの本邦初訳の名著・古典を網羅した全岳人待望の決定版

ヒマラヤ 名著全集

全12巻 別巻2巻
●6月より刊行

編集委員 深田久弥 / 諏訪多栄蔵 / 吉沢一郎

- ① ヒマラヤの謎の河 ベイルイ 諏訪多栄蔵 / 松月久左訳
 - ② カンチエンジュンガ一周 フレツシユフィールド 望月達夫訳
 - ③ エヴェレストへの闘い ノートン 山崎安治訳
 - ④ ネパール・ヒマラヤ ティルマン 深田久弥訳
 - ⑤ 無名峰の聳える国 ティッチー 福田宏年訳
 - ⑥ 神々の御座 ハイム / ガンサー 尾崎賢治訳
 - ⑦ ヒマラヤの五か月 マム 丹部節雄訳
 - ⑧ ナンガ・パルバート登攀史 パウアー 横川文雄訳
 - ⑨ カラコルムの夜明け コンウェイ 吉沢一郎訳
 - ⑩ 地図の空白部 シブトン 諏訪多栄蔵訳
 - ⑪ テイリチ・ミール登頂 ノルウェイ 橋村一豊訳
 - ⑫ カラコルム登山史 グイネツリ 日高信六郎訳
- 別巻① ヒマラヤ巨峰初登頂記 ファンティン (訳者交渉中)
別巻② ヒマラヤ事典

● 第一回配本 6月20日

*書目等一部変更の場合もあります。

■ 菊判箱入豪華装 / アート口絵・写真・地図多数入 予価600~1000円

▼好評の新刊▲

■ 世界山岳名著全集 全12巻 別巻1
編集委員 吉沢一郎 / 横川文雄 / 近藤 等 / 安川茂雄

ヘルマン・プーブル / 横川文雄訳 (版權取得)

⑫ 八〇〇〇メートルの上と下

ナンガ・パルバート単独初登頂で
知られるプーブルの代表的名著!

待望の新訳決定版

① シルクロードの山と谷 / ヒマラヤの漂泊者

カーゾン / 吉沢一郎訳
英国初期の登山家カーゾン卿と代表的
本邦初訳の最新刊 ヒマラヤニスト、プーブルの名著!

フールス判豪華装 各七八〇円 (既刊8巻・6月完結)

■ ケルン叢書 話題の新刊

安川茂雄著 写真 白簾史朗 《ケルン叢書③》

アフガニスタンの山旅

— ヒンズー・クシュ登山の記録 —

話題の最新刊
66年夏 R.C.C.II 隊のヒンズー・クシュ
遠征の貴重な記録を収めた待望編!

(カラー8頁・アート40頁 価八五〇円)

松本龍雄著

初 登 攀 行

絶賛重版発売中
氷雪の谷川に、悪絶の穂高に青春を賭
けてかち得た初登攀の栄光と苦悩!

(アート口絵16頁つき 価五八〇円)

あるガイドの手記

佐伯富男著
《ケルン叢書①》

新装版発売
各新聞雑誌絶賛、話題のベストセラー!
(フールス判箱入 / 価五五〇円)

■ 日本山岳名著全集 全12巻発売中

● フールス判箱入豪華装 各六八〇円 / 全巻揃八二六〇円

あかね書房

東京都千代田区西神田2の19 / 振替東京64150